

馬獣医のよもやま話③1 敷地 光盛獣医師

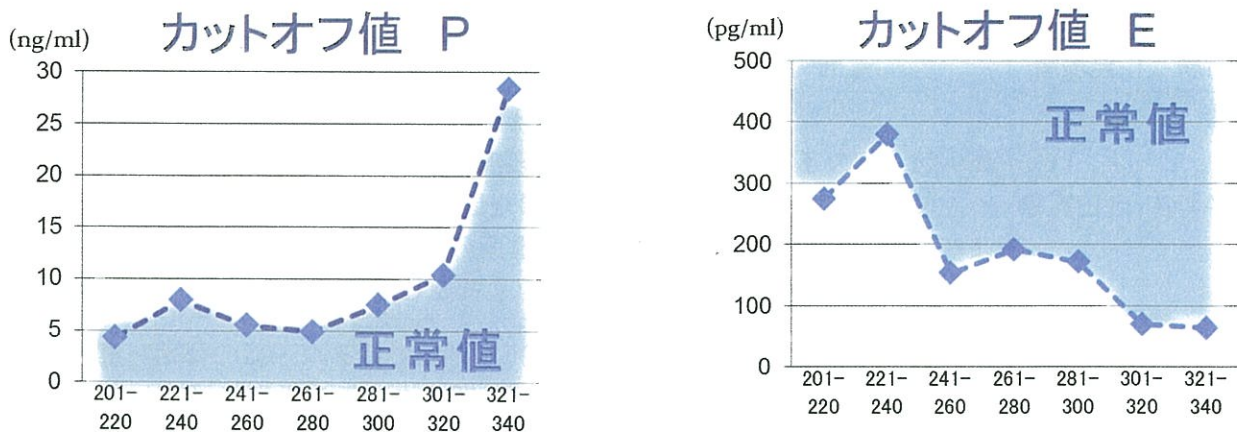
妊娠後期のホルモン検査について ～無事に出産を迎えるために～

浦河診療所 敷地 光盛

朝晩はすっかり寒くなり冬の訪れは間近です。離乳も一段落し、妊娠馬は妊娠後期を迎え、皆様は無事に出産するための準備をされている頃だと思います。日高では、妊娠5週で妊娠維持していた馬のうち8.7%で流産が発生することがわかっています。人の妊婦さんは定期健診で詳しい検査をしますが、馬ではそれほど行われてないのが現状です。ところが、近年日高におきましてホルモン測定やエコー検査による妊娠馬の検査が導入されつつあります。今回は特にホルモン測定についてお話したいと思います。

馬の妊娠後期のホルモン検査では、プロゲステロン(P)とエストロゲン(E)という2つのホルモンを測定します。これらのホルモンは胎子の発育、胎子が感じるストレスまた胎盤機能などと密接に関係しています。そのため、胎子にストレスがかかっていたり胎盤炎になったりすると、早期の乳房の張りや陰部からの汚れなどの臨床症状よりも早く、まずホルモン値に異常が現れることがわかっています。このことから、ホルモン検査をすることで、病気の早期発見・早期治療が可能となるのです。

2010～2012年に多くの団体が協力し日高を挙げて、妊娠後期のホルモン値について大規模な調査が実施されました。この調査では459頭の妊娠馬を対象にして、正常分娩した馬と残念ながら流産などで損耗が発生した馬の妊娠後期のホルモン値を比較しました。その結果、各妊娠時期におけるホルモンの正常値を設定することが出来ました(図1)。



(図1) 妊娠後期におけるP、Eの正常値、横軸は胎齢(日)

P、Eが共に青い部分の正常値であった場合、その後無事に子馬が生まれる可能性は96%以上と非常に結果が良いことがわかりました。逆に、P、E共に正常値を外れていた場合は、(ホルモン値を測った時期が)妊娠240～300日ではその後子馬が流産などで損耗する割合が60～100%ととても厳しい結果となることが判明しました。このことからホルモン値からある程度流産の予知が出来ることがわかりました。

ホルモン値に異常が見られた場合、損耗を避けるために早期に治療を開始することが重要です。この分野はまだ解明されていない部分も多いですが、現在では抗菌剤や子宮の収縮を抑える薬などが使用されています。治療を始めた後にホルモン値が良化すれば予後が良く、ホルモン値が悪化すると損耗が起りやすい(治療を妊娠290日までに開始した場合)ことも今回の調査で明らかとなりました。そのため、治療を開始した後もホルモン検査を継続することが推奨されます。

また、妊娠後期におけるエコー検査は直検の要領で安全に実施できますので、ホルモン検査と併せてエコー検査を行うこともお勧めします。みなさんもぜひ妊娠馬の定期健診に取り組んでみてはいかがでしょうか？

※この記事には、H22～24生産地疾病等調査のデータを引用させていただいております。